

図書館でのニーノ・ロータさがし

小林 一男

今から6年前、「くにたち」が誇るモーツァルト研究に加えて、彼以外の作家のオペラ研究を充実させようと、音楽研究所にオペラ演奏研究部門が立ち上げられました。そこで私は以前から興味を持っていた、ベルカントからロマン派へという、イタリアオペラ全盛期後、プッチーニを含むヴェリズモから始まるイタリアの、近現代オペラ作品にフォーカスしての研究を始めました。私のイタリアでの恩師マリア・カルボネ先生が、戦後すぐの1950年代、作曲家ピエトロ・マスカーニ自身と数多くのオペラ共演をしたソプラノ歌手であったことや、私自身も日本に帰国してから、日生劇場でのマスカーニのオペラ『イリス』の日本初演に出演したことなど、イタリア近現代オペラに大きな興味を持っていたのがきっかけでした。あまり上演されることのない作品の資料を集め、実際に音にして演奏法を研究し、可能なら舞台化してみろという方法で、最初はプッチーニ『つばめ』から始まり、次にマスカーニ『友人フリッツ』と続けて上演し、その間に徐々に視野が開け、イタリア近現代オペラの世界の広さが少しずつ見えてきました。その後もつと意欲的に、現代に近い作家や作品で、我々に完全上演可能な規模の作品を探している時、偶然にも我が図書館で見つけたのがニーノ・ロータの『ノイローゼ患者の一夜』という、一幕物オペラのヴォーカル・スコアでした。これをもとに次の年の研究を開始してみると「道」、「ロメオとジュリエット」や「ゴッド・ファーザー」でオスカを受賞という、超の付く映画音楽の大家と思っ

ていたニーノ・ロータが、思いもかけない「クラシックの神童」と呼ばれて育った、純音楽それもオペラなど劇場音楽を本業に考えていた作曲家だという側面が分かり、一挙に研究にのめり込んでいきました。

図書館からの資料探索は海外のデータベースに及んでも、まだ没後間もない作曲家のせいもあってか先行研究資料などが極端に少なく、かえってインターネット上で現在進行中の研究情報・資料などへのルートがいくつか見つかってきました。1979年に亡くなったロータは親しい友人に、「10年間は触らないように」と言い残して大量の資料を残しました。それらは家族によってイタリア・ヴェニスに「チーノ財団」に「ニーノ・ロータ資料館」として寄贈され、没後10年を経て資料の整理が始まってみると、そのあまりの膨大な量と、特に楽譜に関しては映画制作現場での作曲作業の習慣や特性からか、楽譜の小片や断片化したものが非常に多く、その整理に大変な労力と時間が費やされて、楽譜にまとまって出版されてくるのに極めて時間が掛かる状態であることがわかり、今もそのペースは変わっていません。ロータの純音楽に関する研究拠点は、今現在もここヴェニスの他には、ミラノやバリなどに限られています。それらの研究活動、発表物を追いかけて、バリーの街や音楽院を訪ねたりしながら、未出版だったものが徐々に出版されてくる。そんなオペラの舞台を静まり返った図書館の空間で、想像して夢見るのがまさに至福の時と言えます。